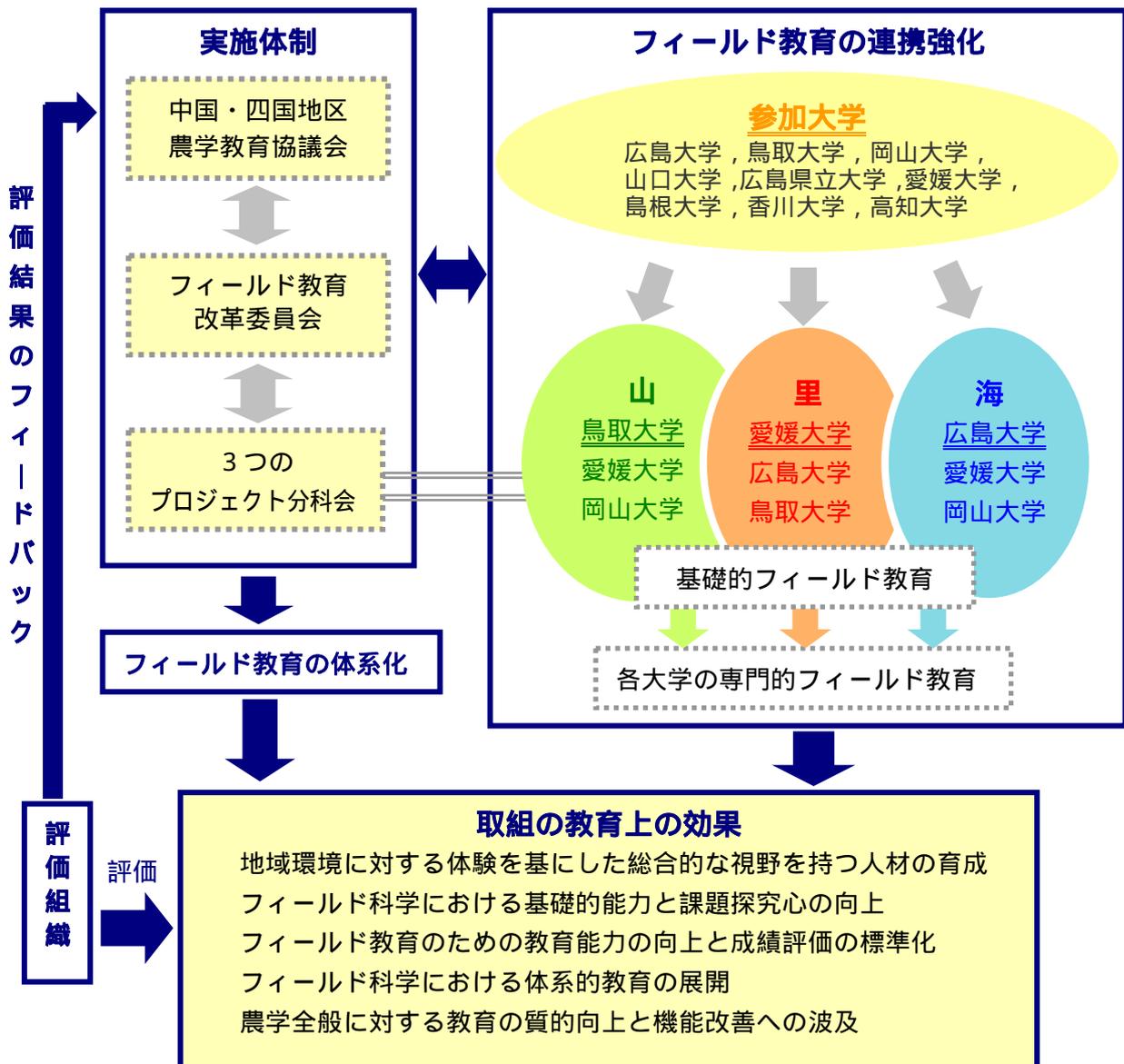


大学等名 広島大学、鳥取大学、岡山大学、山口大学、広島県立大学、愛媛大学  
 テーマ名 テーマ4：他大学との統合・連携による教育機能の強化  
 取組名称 大学間連携によるフィールド教育体系の構築  
 - 中国・四国地域の農学系学部をモデルとして -  
 取組学部等 生物生産学部  
 取組担当者 広島大学 生物生産学部長 教授 谷口幸三  
 取組期間 平成16年度～平成18年度  
 Webサイト <http://home.hiroshima-u.ac.jp/gendaigp/>

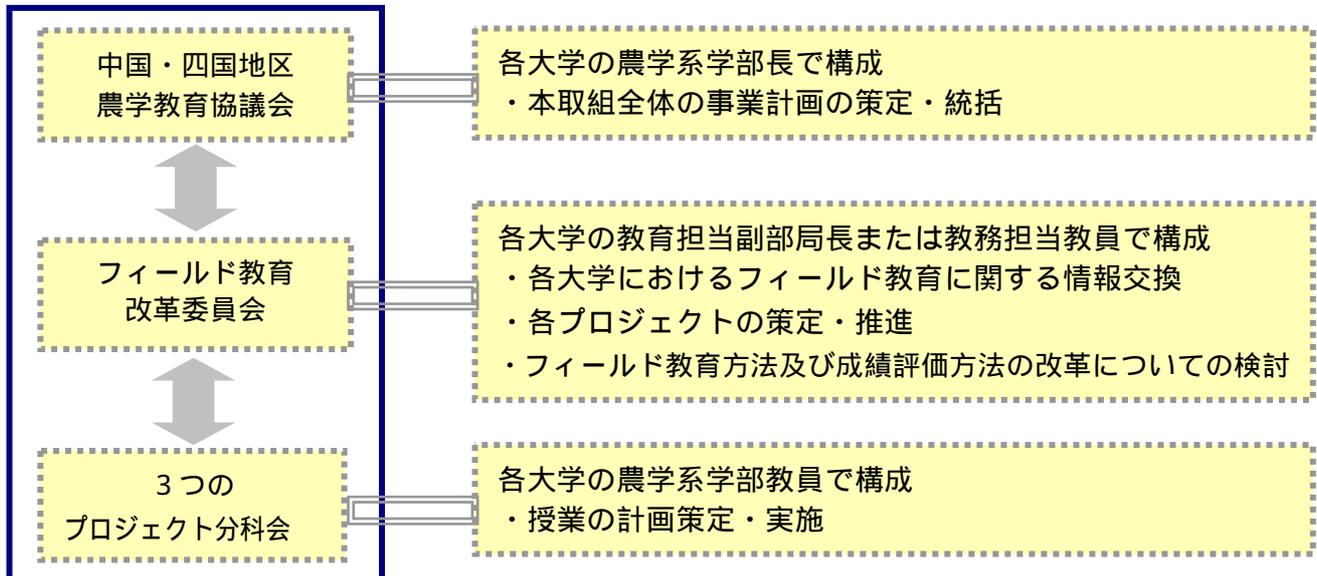
### 取組の概要

この取組は、中国・四国地域における国公立9大学の農学系学部が連携・協力して、各大学のフィールド施設等を相互に利用することで、それぞれのフィールド教育を補完し合いながら、食と環境に関する総合的なフィールド教育の体系化を図ったものである。取組では、自大学でのものとは違ったフィールド（山、里、海）教育として、各農学系学部の主に1、2年次生を対象に、夏季に4泊5日の集中形式で、3演習科目（講義、実習、調査、発表）を開講し、学生交流を行った。各演習とも、複数大学からの教員が共同して担当した。取組は、フィールド科学に関する基礎的な能力の育成や、フィールドでの課題探究心の刺激、地域環境に対する総合的な視野の涵養などに有効であった。また、参加大学間での連携教育と教員交流はフィールド教育に関する教育方法や成績評価法の改善に役立った。



## 実施の経緯・過程

【実施体制】 各大学の学部長で構成された農学教育協議会で取組の基本方針を定め、各大学での取組に責任を持った。その下で、参加大学の教務担当教職員からなるフィールド教育改革委員会が基本方針に沿った取組のプロセス管理を行いながら、3つのプロジェクト分科会(各演習担当教員)が各年度の具体的な演習計画を策定して、実施した。



【実施状況】 里山(鳥取大学演習林)、果樹園芸の里(愛媛大学農場)、里海(広島大学実験所、練習船豊潮丸)の3つのフィールド演習科目(定員各50名)を2年間に亘って開講した。各大学からの合計受講希望者は平成17年度で443名と多く、平成18年度は前年度希望者を優先したため243名であった。各参加者は受講大学までの旅費以外に、食費や保険料等約1万円の実費を支払った。なお、フィールド教育改革委員が分担して、各演習科目の実施状況を見学し、委員会に報告した。

【教育方法】 各演習科目とも主担当大学の教員(1-2名)以外に2大学からの教員各1名が加わって、共同しながら講義、実習、講演会等の計画を練り上げ、実施した。また、実習では大学、学年を混合した数グループに各々TAを配置し、調査、データの取りまとめ、発表の指導を行った。

### 【各年度の実施内容】

平成16年度: 単位互換協定の締結、各大学におけるフィールド教育内容の紹介、取組内容の具体的な検討及び必要器材の準備を行った。

平成17年度: オリエンテーションと広報活動、参加者の確定、実施計画の周知、各演習科目の実施、受講生と担当教員へのアンケート調査、実施結果の取りまとめを行い、次年度計画を策定した。

平成18年度: 前年度と同様の取組について計画内容を改善した上で、実施した。3年間の取組結果について外部評価を受けると共に、報告書を作成して全国の農学系学部に配布した。

## 目的に対する成果、人材養成面での達成度

地域環境に対する総合的な視野を持つ人材の育成とフィールド科学における体系的教育の展開: 各大学とも中国四国地域の出身学生が多い中、同じ農学系学部であっても大学によって附属施設の充実度やその設置環境条件が違うために、フィールド教育の内容も違う。本取組では、中国四国地域全体をカバーした大学間連携によって、山、里、海に関するフィールド教育の相互補完が可能となり、受講生に地域環境についての総合的な視野を持たせることができ、また、各大学のフィールド教育の体系化に寄与できた。こうした中国四国地域の農学系学部間連携教育の成果と経験によって、今後の大学間連携教育を強化する上での基盤を築くことができた。

フィールド科学に関する基礎的能力と課題探究心の向上: 集中宿泊下での講義と実習、調査、発表、講演を組合せたことで教育内容についての理解が深まった。また、大学と学年の違う学生が同じグループを構成することで相互の学習意欲が高まり、TAによる適切な指導下で、フィールド調査デー

タの取りまとめ法と発表方法の基礎を身につけることができた。特に、フィールド教育に発表を取入れたことが単なる体験に終わらせず、理解力を高め、より自発的な学習態度を引き出すのに有効であった。

参加 TA の意識向上：本取組による副次的成果として、各演習では複数大学からの TA が加わったことで大学院生間の交流も行われ、相互に向上心が刺激された。

以上の成果は、受講生と担当教員に対するアンケートや TA による報告書で確認された。

### 自大学の教育改革への影響、他大学等への波及効果、地域社会等への波及効果

フィールド教育のための教育能力と成績評価法の改善：各大学のフィールド教育の紹介及び他大学教員との共同授業によって、教育方法に関する優れた点をお互いに学びあう実践的な場を提供できた。フィールド教育の成績評価の方法については、各大学ともこれまで担当教員任せであったが、本取組では平成 17 年度の各演習間で成績評価法がかなり異なった結果を受けて、フィールド教育改革委員会と各プロジェクトの合同会議での協議を行い、18 年度には受講態度、発表、レポートの配点を標準化できた。

参加大学での教育改革への波及効果：本取組を通して、他大学のフィールド教育の優れた点を学びあう機会が初めて提供され、各大学での改善課題が明確になった。また、講義と実習、発表を組合せた演習科目が教育効果の高いことが証明され、今後の農学系学士課程教育における教育方法の改善に向けた実践例を提示できた。こうした成果は延べ 3 回の農学部教育協議会、7 回のフィールド教育改革委員会などを通して、全ての参加大学間で共有されており、今後の各大学での教育改革につながるものである。

広報活動の状況：参加大学の学生には、ポスターやビデオ、ホームページ、オリエンテーションを通して、周知するだけでなく、現代 GP フォーラムへの参加などにより広く公表された。また、取組の内容と結果については、既に報告書として取りまとめ、全国の農学系学部へ配布した。

### 学生等の評価

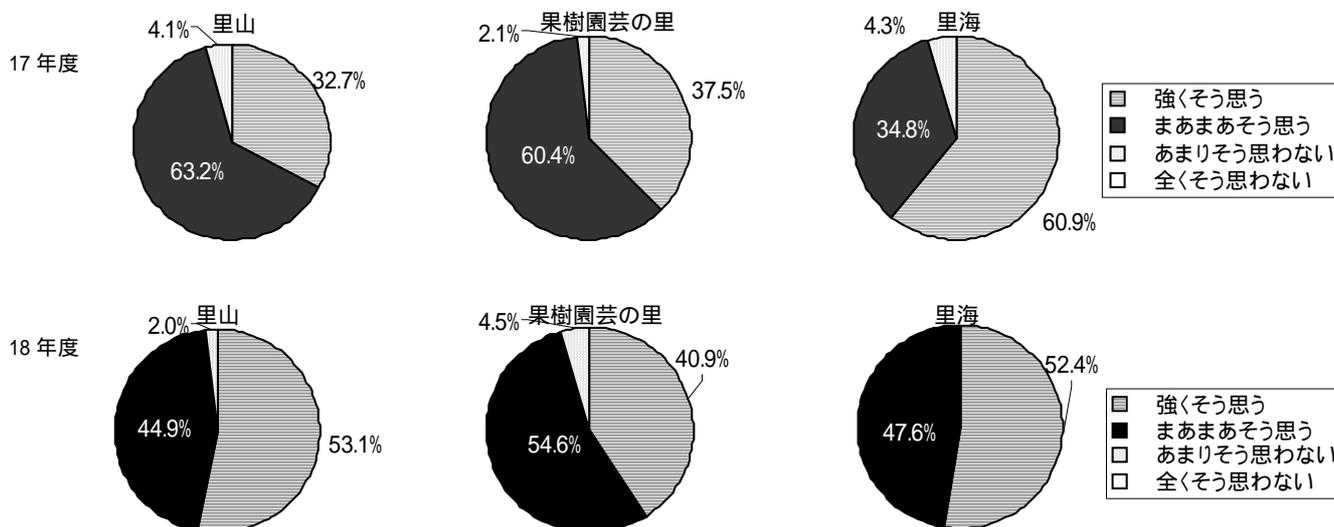
平成 17、18 年度に行った 3 演習科目の実施内容に関するさまざまな事項を受講生へのアンケート調査によって評価した。その結果、年度と演習科目間での変動はあるものの、「受講したフィールド演習は有意義であったか否か」を 4 段階評価で尋ねたところ、「強くそう思う」と回答した者が 70～85% であり、残りの学生は「まあまあそう思う」と回答した。同様に、「理解し易かったか否か」については、33～61% が「強くそう思う」、35～63% が「まあまあそう思う」であり、「あまりそう思わない」が数%であった。これらの評価結果が本取組に対する参加大学での高い評価へと結びついた。

一方、各演習科目を担当した教員へのアンケート結果では、4 泊 5 日の集中授業は教員にとっては負担が大きいが、学生の好反応と高評価が教育の達成感、充実感をもたらしたと述べている。

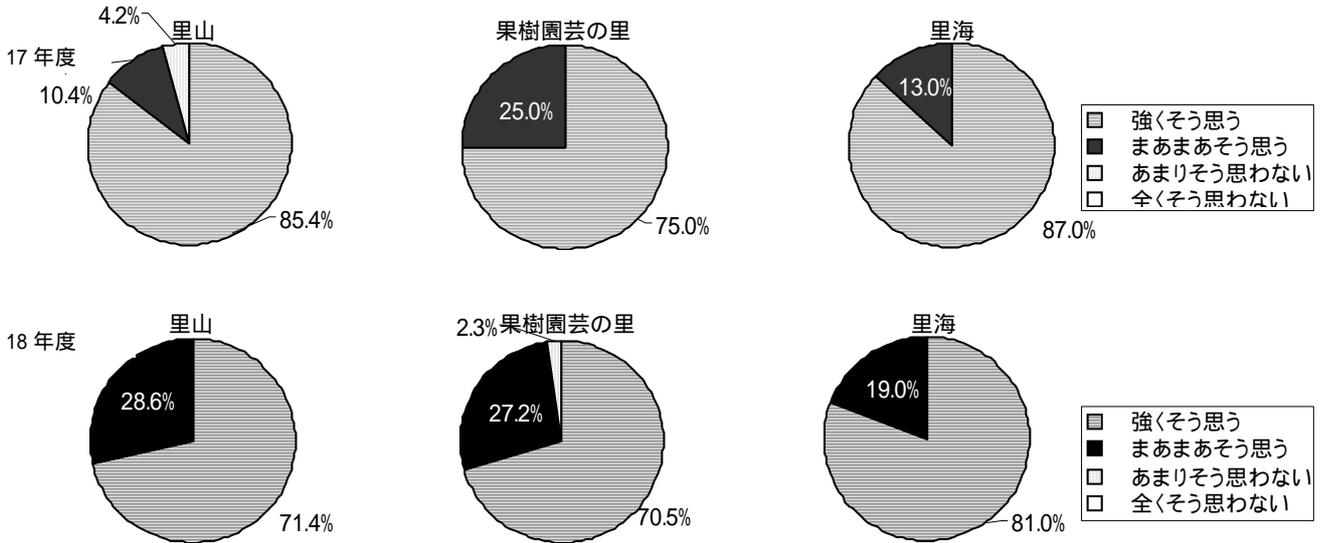
(以下、学生による授業評価アンケート結果の一部抜粋)

- 5 . 今回のフィールド演習全体のことについてお尋ねします。

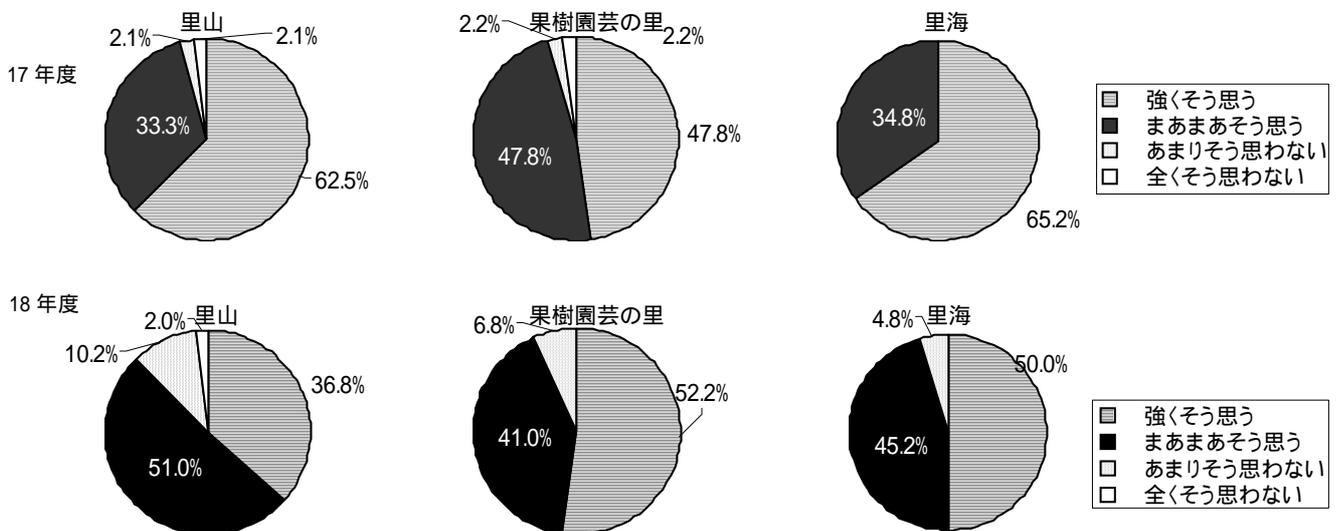
(1) 受講したフィールド演習は理解しやすかった。



(2) 受講したフィールド演習は有意義であった。



(3) 今回の演習を受講してこの分野についてもっと知りたくなった。



### 学外からの評価

第3回農学教育協議会において、笹賀一郎（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター長）、金井幸雄（筑波大学生物資源学類長）、小八重祥一郎（宮崎大学農学部長）の各氏に、本取組の内容と結果に対する評価を頂いた。いずれの方からも本取組に対する高い評価が与えられたと共に、取組の継続と今後のわが国における農学教育改革のための実践例として普及していく必要性を指摘いただいた。なお、本取組は、全国附属農場協議会や演習林協議会において、フィールド教育改革の実践例としても取りあげられ、また、既に他の地区での農学連携フィールド教育の参考例ともなっている。

### 取組支援期間終了後の展開

本取組によって多くの成果が得られ、特に受講生からの評価が高かったことから、中国四国地区農学系学部長会議として、取組支援期間の終了後も担当教員に対する支援を強化しながら、取組を継続していくことが確認されている。また、これまでの3演習科目以外にも、大学間連携フィールド教育として、平成19年度から岡山大学附属牧場を用いた牧場演習を新たに開講することとなった。なお、支援経費が無くなったことから、受入れ大学の金銭的負担を軽減するために、学生を派遣する大学は1名につき1万円を受入れ大学に支払うことが取り決められている。こうした措置により、本事業の継続が実質的に保障されている。

本件お問合せ先 広島大学生物圏科学研究科部局長支援グループ

082-424-7905